



環境Kidsエキスパート プロジェクト

～世界に誇る環境リーダーを育てよう～

こどもが持つ創造力、発信力、
共感力を伸ばし、それを国際協力の世界に
活用していくための仕組みづくり

事業目標

学生から途上国で環境改善・気候変動対策を図る革新的なアイデアが創出され、子供から子供、子供から大人への協力事業の実践を通じて、途上国の環境・気候変動対策の課題解決や生活改善に寄与する。



こどもと一緒に
新しい価値/ソリューションを開発



創造力

革新的なアイデア

発信力

広くリーチする発信

共感力

こどもからこども
こどもからおとな

事業内容（2023年度）

@横浜（NPO（申請中）アサnteと協働）

- ・ ドミニカ共和国の廃棄物問題、サルガッサム（回遊性浮藻）問題をテーマにしたワークショップ（各1回）の実施
- ・ 振り返りワークショップの実施
- ・ アイデアコンテストの実施
- ・ 作りこみワークショップの実施
- ・ 駐日ドミニカ共和国大使、JICA留学生、
- ・ 研修員向けソリューション発表会の実施



@サントドミンゴ

- ・ 環境Kidsワークショップの実施
- 立ち上げたことによる、共感・興味の輪の拡がり
- ナショナルスタッフが営業マンとして活躍





2023年度 優秀コンテ ンツ

- ・ 府川佳太さん（小5）：
サルガッサムを観光商品に加工し、収益をサルガッサム回収費用に充てる
- ・ 大杉侑羽さん（中1）：
廃棄物問題を身近に考えられるイベントや廃棄物埋立地見学ツアーの企画
- ・ 村上貴亮さん（中2）：
産業廃棄物処理改善に向けて企業と協働でデジタル技術も活用したごみのポイント制度
- ・ 渡邊太樹さん（中2）：
サルガッサムを肥料やバイオマス燃料にして第二次産業の活性化やエネルギー問題解決につなげる

➤実施拠点拡大

❖日本国内：横浜（NPO）、沖縄（一社、企業）、広島（学校法人）

❖海外：ドミニカ共和国

➤実施テーマ

❖防災と開発：講師：和泉崇司さん（防災起業家、俳優）

❖ファッションと開発：講師：谷裕介さん（ファッションプランナー）

➤実施方法

❖各拠点で環境Kidsワークショップを実施、日本国内では各地域の子供たちが集まり東京で交流会を開催

➤その他

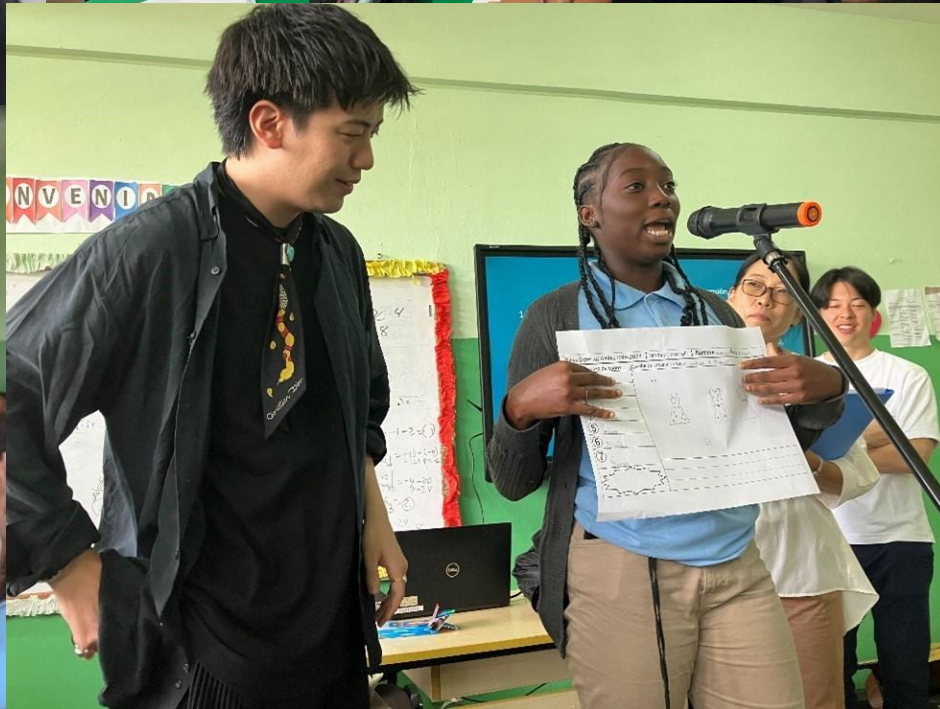
❖事業理解促進・ブランディングに向けた動画制作、楽曲制作

- 環境Kidsエキスパート実施体制の構築
- 全25回の学びの場の創出
- 3地域の子供たちによる交流会の実施
- 廃棄物、サルガッサム、防災と環境、ファッションと環境の4つの教材の完成・公開
- 全8作品の動画制作・公開
- サステイナブルファッション啓発楽曲「十人十色～Moda Sostenibile～」完成
- 具体的な環境ソリューションの提案



交流会の様子







JICA環境KIDSエキスパート事業 2024年度の取り組み | 海外での取り組み - JICA

• JICA環境KIDSエキスパート事業 教材集 | 海外での取り組み - JICA

- ドミニカ共和国のサルガッサム問題 
- Sargazos en República Dominicana 
- ドミニカ共和国の廃棄物問題 
- Residuos Sólidos en República Dominicana 
- ファッションと環境：服の旅人（谷裕介さん作成） 
- Moda y Medioambiente : Viaje de la ropa（Sr. Yusuke Tani） 
- 環境と防災：日本と世界の防災を知ろう（和泉崇司さん作成） 

さまざまな災害



地震



台風



豪雨



火災



津波



雷

地震・雷・火事・オヤジ

オヤジが優しくなった現代も、災害の脅威は残っています。

① サルガッサム問題の説明



SARGASSUM



1人あたり（年間平均）の
衣服消費・利用状況について考えてみよう!!

購入枚数

約**18**枚

手放す服

約**15**枚

着用されない服

35枚

2022年度調査

手放す枚数よりも購入枚数の方が多く、
一年間一回も着られていない服が一人あたり35 着もある。
ファッションの短サイクル化や低価格化が
より多くの服を生み出し、消費されることにつながる。

具体的なアイデア: サルガッサムを観光商品に



具体的なアイデア: ネクタイピンを防災グッズに

ネクタイピンが防災グッズに!





社会音楽家中江川力也さんと社会派ラッパーJhon Wayneさん共作による啓発ソング！

テーマソング 十人十色～Moda Sostenible～ | 海外での取り組み - JICA

➤ JICAが実施する付加価値の見極め。Why JICA?
→ 大手企業・財団やNGOが多数同様の事業を実施。
SDGs甲子園というイベントも存在する中で、

- ① 開発途上国の課題を教材として制作・提供できる
- ② 開発途上国のリソースパーソンやリーダーに向けて子供たちが考えたソリューションを示すことができる
- ③ パートナーとの協働を通じてソリューションを実際に製品化したり、開発途上国で実践できる可能性がある
- ④ JICAが持つネットワークやインフラを活用できる
- ⑤ 開発に関心を持つアーティスト・エンターテイナーとの交流が持てる

➤ マネジメント・コーディネーション

- 主な活動現場が日本国内だったこともあり、主管部であるドミニカ共和国からの遠隔マネージメントは一部で限界があった点は否めない。係る状況下で、兼務発令を受けた国内機関のスタッフや横浜、沖縄のスタッフに事業全般を支えていただいた。

➤ 参加者の募集・広報

- 横浜以外の地域においては2024年度に初めて活動を実施。実施サイドのチームアップからスタートする必要がある、学生の募集には困難が伴った。今後実績をつけていきイベントとしてブランディングしていったり、学校のカリキュラムとリンクさせていくことで参加者は増える可能性がある。一方数が多ければ良いというものではなく質を伴う必要があることから、程度の見極めが必要となる。

- 2年間の実績を踏まえ、横浜のNGO ASANTEがプラットフォームになり、今後の活動を継続。
- ASANTEの活動として横浜における環境Kidsワークショップを継続していくほか、全国への出前授業も要請に応じて対応。
- 沖縄では、（一社）おきなわ国際協力プラットフォームがJICA沖縄と連携して、地域のパートナーと今後は「〇〇KIDSエキスパート」として様々なテーマでの実施を計画。（2025年度は「防災KIDSエキスパート」を計画）
- メキシコでも環境教育隊員と連携して活動を行い、教材の作成も検討する。
- 2026年度以降は、補助金等の獲得の可能性も見極めつつ活動を展開していく。
- 活動に必要な予算は非常に限定的で、講師の旅費と謝金等。これらの予算を最低限確保することで、JICA国内機関や教育機関のイニシアティブにて活動を行うことが可能。

